

第2回 生息環境専門部会

◆ 舞鶴遊水地におけるタンチョウの営巣環境の構築、環境保全と利活用に関して、具体的な取組内容について議論が行われました。

- 開催日時：平成29年10月3日（火） 15:00～17:00
- 実施場所：札幌開発建設部 会議室
- 参加人数：24名（委員10名、報道機関・事務局等14名）
- 参加機関：学識経験者、寒地土木研究所、北海道地方環境事務所、札幌開発建設部、長沼町、（公財）日本生態系協会 等

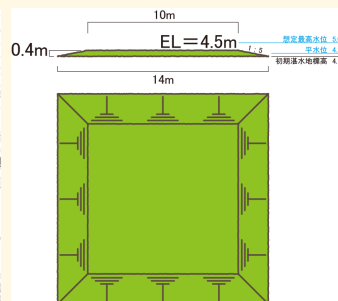
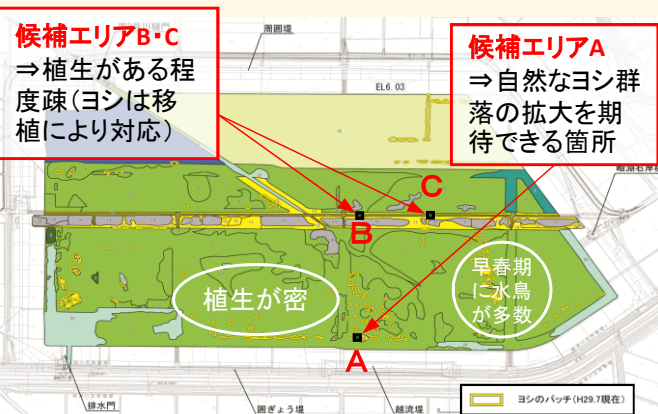


営巣環境構築方策

- タンチョウの営巣環境を構築するため試験的に遊水地内に微高地を造成。
- 抱卵期(4-5月)の冠水すると繁殖に影響を及ぼすため、10年に一度程度の冠水頻度となる高さで微高地を造成。
- 微高地造成箇所では、状況に応じてヨシを移植し、ヨシ群落の拡大を目指す。



委員 矢部和夫教授
(札幌市立大学 デザイン学部)



左図：微高地造成候補エリア
上図：微高地形状イメージ

※微高地造成は3-5箇所程度を予定。微高地の形状は現場状況に応じて柔軟に対応
※微高地の高さは平水位(EL=4.3m)を基準に0-60cm程度で試行する

社会的課題への対応

- 外来種アライグマ対策は周辺市町や北海道（振興局）とも協力して広域的に実施することが重要。
- 食害の実態把握、調査手法等について引き続き議論する。

舞鶴遊水地の環境保全と利活用

- 遊水地にタンチョウが飛来した際、来訪者が過度に接近し、タンチョウが警戒・飛去した事案が発生。
- 利用者のマナー啓発が急務であることを再確認。
- 自然環境の保全を第一に「環境保全と利用のガイドライン（仮称）」の策定と周知を進める。



委員 正富宏之名誉教授
(専修大学北海道短期大学)



※接近した車両から来訪者が降りたため、警戒したタンチョウが飛去

■地域づくり専門部会からの報告

利活用の促進、利用者へのマナー普及等を目的に、利活用の拠点となる施設を試験的に仮設。



【総括】

- 遊水地の良好な環境形成に向け、地域での取組みが進んでいることを実感。
- 舞鶴遊水地での取り組みが、先行事例となるよう取り組みの整理・普及が必要。
- 流域に遊水地群が整備されることから、広域的な連携に向け、協議会でも議論を図っていく。



座長 中村太士教授
(北海道大学大学院農学研究)

タンチョウも住めるまちづくり検討協議会

第2回 生息環境専門部会 議事概要

〔日 時〕：平成29年10月3日（火）15：00～17：00

〔会 場〕：札幌開発建設部 会議室

〔出席者〕：24名（委員10名、報道機関・事務局等14名）

（1）タンチョウの飛来状況等について

- 舞鶴遊水地では北側の採草地が『ねぐら』として利用されている（草丈低く見通しが利くためと思料）。
- 『ねぐら』としている採草地付近で営巣する場合、営巣期に大型機械等により作業がなければ影響は軽微と思料。
- 昨年度に続きタンチョウが飛来。遊水地を『ねぐら』として利用するなど、流域での定着が進んでいる。
- 今後、タンチョウに関する情報の広域的な共有体制が必要。

※来訪者が過度に接近したためタンチョウが警戒・飛去した事案について

- 定着初期における過度な干渉は、定着の阻害要因となるため特に注意が必要。
- 事案については、早急に再発防止や利用者の意識啓発を図る必要がある。

（2）地内の営巣環境構築について

- 営巣環境を構築するため、試験的に微高地を設置。
- 抱卵期(4-5月)に冠水すると繁殖への影響が懸念される。また、微高地を高くし過ぎると外来種や木本の侵入が懸念される。
- 微高地の高さは10年に1度程度の冠水頻度を想定。

（3）長沼町におけるアライグマ対策について

- 効果的な対策とするため、周辺自治体や関係者等と協力した広域的な対策が必要。
- 協力農家で開始したワナ日誌(捕獲努力量の把握調査)を手始めに、近隣住民と連携を図る。

（4）舞鶴遊水地の環境保全と利用のガイドラインについて

- ガイドラインの趣旨については了承。より具体的な内容について引き続き検討を進める。
- ガイドラインをいかに地域に定着させるかが課題。

（5）タンチョウ生息に伴う社会的な課題について

- 食害の実態把握、調査手法等について引き続き議論する。
- 長沼町では鳥類のほかに、シカなどによる食害も懸念される。

（6）その他

- 社会実験として利活用の拠点となる施設を仮設する。情報発信となるパネルを順次充実させ、積極的に活用していく。

【総括】

- 遊水地の良好な環境形成に向け、地域での取組みが進んでいることを実感。
- 舞鶴遊水地での取組みが、先行事例となるよう取組みの普及が必要。
- 流域に遊水地群が整備されることから、広域的な連携に向け、協議会でも議論を図っていく。